
断片集

笛吹葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断片集

【Nコード】

N4116J

【作者名】

笛吹葉月

【あらすじ】

時間も場所もわからない。でも、ひよつとしたらあの人に似ている。記憶の欠片。誰かの物語。貴方の知っているひとはいますか？***半永久的プロローグ。断片集という名の短編集。実験的に超不定期更新です。

黄昏の町

気付いたら町の中にいた。

石畳の通りの真ん中で、わたしはぐるりと周りを見回してみる。茜色の空、ぼんやりとした光が揺らめく街灯、規則正しく並んだ家々の窓、そして通りを歩く人々。町はこうあるべき。そんな定義に則ったような町並みだった。

わたしは既にとても大事なことに気が付いていた。絶対に失くしてはいけないものを、ここに来る途中で手放してしまったのだ。

どうしようか。わたしは途方に暮れる。早く探さないと手遅れになってしまう。切迫感が体を突き動かした。一步、踏み出す。そしてまた一步。早く、探さなければ。

わたしは、人間である。わたしは、女である。何となくわかること。

でもそれは求めているものではない。

わたしを表す言葉なら、恐らく探せば多分にあるだろう。けれどわたしは、わたしがわたしであることを証明する術を知らない。

鎖がなくなっても求めた自由は手に入らなかった。自由どころか、存在すら曖昧なものになってしまった。

そんなことを思いながら、わたしは彷徨う。行くあてもなくずっとずっと。

「わたしの名前、知りませんか。誰かにとられたんです」

道行く人に尋ねても、彼らは首を振るばかり。

「それらしいものは見なかったよ」
「助けてあげられなくてごめんね」

そう言ってくれる人々に、次はわたしが首を振る。それでもみんな、わたしの持つていないものを持つている……それはちよっぴり羨ましくもあつたけれど。

わたしは長い間彷徨い続けた。不思議と疲れは感じなかったし、町は、いつまでも夕暮れだった。

永遠の黄昏。明けず、暮れず。光と闇の狭間。橙色に染まったモノ達が、伸びた影を地面に貼りつけている。

「あなた」

不意に声をかけられた。道端に蹲った老婆が、しわくちゃな顔の奥に隠れた瞳でわたしを見ていた。

「探しものかい」

うなずいたわたしに、老婆は細い路地を指差す。

「向こうへ行くといい。あなたの仲間がいるかもしれないよ」
「ありがとう」

わたしはお礼を言い、薄暗い路地に入ってみた。一人がやっと通れるくらいの小路を抜けると、そこには公園があった。中央には大きな噴水。黄昏色の水が蕩々と流れている。きれいだなと思った。けれどそこにいる人々は噴水に目もくれない。地面を見つめる人、或いは腕組みをして歩き回る人。

その中の一人がわたしの方へやって来た。男の人だった。

「俺の名前、知らない？」

「ごめんなさい。わたし、自分の名前もわからないんです」

「そうなんだ。なら、ここにいるみんな、仲間だ」

どうやらこの広場に集まった人々は、わたしと同様に失くしものをしたらしかった。わたしには彼らははっきり見える。だが彼らの輪郭は厳密ではない。きつとわたし達以外にとっては、わたし達は存在しないものなのだ。

「君、遺失物取扱所には行った？」

「いいえ」

「それじゃあなかなか見つからないさ」

そうか。男性に言われてわたしは反省した。闇雲に探しても駄目なんだろう。まずはそこで聞いてみようか。ひよっとしたら、誰かが届けてくれているかもしれない。

「俺なんてかれこれ90年も探してる」

そう言っって男性は古いノートを見せてくれた。四本の縦棒とそれを貫く一本の横棒。無数に記された時の跡。

わたしは少しがっかりした。わたし達のさがしものは案外、見つかりにくいようだ。

と、その時広場に新たな来訪者が増えた。長身の二人の男性が、靴底で石畳を叩きながら近づいて来る。かつちりとした黒服を纏った男達は、夕暮れの町にあっても橙色に染まっていない。

「時間だ」

と黒服は言った。手に持った紙を、わたしの隣に立つ男性に突き付けている。

「この規定通り、君を町から追放する」

「そんな、」

「90年も経った今、君を覚えている者はいない。最後の縁者の灯が昨日消えた。よって当局は、君を迎えにくる者がいる可能性はゼロに近いと判断する」

男性はうなだれたまま、一人の黒服に連れて行かれてしまった。わたしはまた少しがっかりした。

もう一人、残った黒服は、今度はわたしを見る。

「それから君にも町を出してもらおう」

何故だろう。わたしはまだこの町に来たばかりなのに。

「君は運がいい。向こうから迎えが来たそうだ。我々は君を向こうへ送り出すことに決定した」

「向こう？ あなた達は一体」

「この法により最重要機密に規定されている。君は我々のことを知る必要はない」

男に促され、わたしは広場を抜ける。誰もこちらを見なかった。人々は地面を見つめ、或いは歩き回っていた。流れる水の音だけが静かに全てを包んでいる。

黒服の男は先をどんどん歩いていく。わたしは入ってきた時とは別の道を通って町へ出た。それから町を抜けて、ひとつの扉の前に

連れて来られた。

いつの間にか、世界は夕暮れではなくなっていた。代わりに何もかもが白かった。空も地面も何も無い世界。ぽつねんと浮かぶ扉とわたし達の方が、色がある点では異質だった。

わたしが扉に手をかけると、男性は半歩後ろに下がる。

「君は運がいい」

男は繰り返した。君、としか呼ばれないことが寂しかった。

「君に祝福を。二度とここに帰ることがないように」

無機質な声にうなずき、わたしはそつと扉を開けた。

恋天使

「匂うなア」

「匂うねエ。こりゃア相当強い“念”だよオ」

「キシシシ。世の中まだ捨てたモンじゃねエなア」

《きゅこきゅこ》

「当ったり前さねエ。思いつてのは止めらんないのさア」

「違エねエな。キシシ。ビビんなよ。俺ア女相手だろうが助けねエからな」

「わっちを嘗めるんじゃないよオ。《後継者》は誰だい、エエ？」

「ケツ、時期がズレただけだろうに」

「黙りや。口をこれで縫い止めてやるうかい。わっちと組んだことを誇りに思いなア」

《ひうんひうん》

「……………」

「……………ところでさア《千里眼》」

「んア？」

「さっきからなんだい、これ。ずっとわっちらを見てるよオ？」

《つんつん》

「そっちが連れてきたんじゃないかねエのか」

「馬鹿言えやい。わっちにこんな気色悪い生き物を連れる趣味はないよオ。こーんな目玉のぐりつとした毛玉」

《ふにぶに》

「しかも一つ目」

《もしやもしや》

「ああー！ ちょ、こいつ、わっちの髪の毛を！」

「キシシシ！ そりゃアお前、そんだけ髪伸ばしてたら齒に引っ掛

からア」

「……っ！ 痛ア……！ こんちきしょう、一体何がしたいんだい？！」

《ぴこぴこ》

「え、ついてく？ わっちらに？」

《こくこく》

「……。仕方ないねエ。連れてこうかい《千里眼》？」

「好きにしな。俺らの仕事が見てエならそうすりゃいい。邪魔すんなよ、ちっこいの」

「あんたよか役にたつたら交換するよオ？」

「さっきまで気色悪いとか言ってただろが」

「そりゃ別の話ってモンさア。使えるか使えないかが問題さね」

「……まアいいさ。気が変わりやすいのは今に始まったことじゃねエし」

「何か言ったかい？」

「いいや。俺はなア、ついこの前もあの偏屈ジジイに釘刺されたんだよ」

「は、は。あんたのサボり過ぎだろうよ」

「うつせエや。ちゃんんと命中してんだから、文句言われる筋合いはねエ」

《きやつきやつ》

「おら、そろそろ対象が来るから用意しろよ」

「あいあい」

《かちん、ばしっ》

「弦よし、矢じりよし。あんたは」

「今更聞くなよ。俺はこれなの」

《ぱちんっ》

「……いつ見ても変なやり方だねエ。それで射^うてる意味がわからないよ」

「わかんなくなっただけだからいいだろ？ じゃア俺が女の方で、

そっちが男な」

「わかつてるよオ、まったく……。いいかい、外しちゃいけないよ？ 思う相手と結ばれないと、厄介なことになるからねエ」

「当たったところで続くかどうかは知れないがなア」

「知ったことかい。そりゃアわつちらのせいじゃない」

「それが《後継者》になる秘訣かい？」

「ふん。わつちの実力さね、実力。……。さ、ちっこいの、行くよ」

「氣イつけない毛玉ア。そいつの動きは化けモンだぜ」

「あんたに言われたかないねエ。それにわつちはまだピチピチの八
タチだよオ？」

「“三ケタ”もサバ読む奴を俺ア初めて見たね」

《か、かかん、かんっ》

「へんっ、つまらない話は後だよ、後。早くしないと見失っちゃう」

「キシシ、腕が鳴るぜエ」

「さアて……。ちっこいの、振り落とされるんじゃないよオ！」

「キシシシ！！」

《しゅぱあん！！》

花と戦争

「ねえ、わたしには夢があるの。それはね、何にも脅かされな
いで、原っぱでお昼寝することよ。だからわたしは、この戦争を終
わらせてみせるわ」

彼女はとても楽しそうに、そう僕に言った。

僕と彼女が出会ったのは、今からちょうど一年くらい前だった。
僕は小さな花屋で働いていて、彼女の家には配達で行ったのが最初
だ。

僕が花を手渡すと、彼女はにっこり微笑んでお礼を言ってくれた。
飛び抜けて美人ではなかったけれど、彼女の笑顔はとても魅力的で
配達に行く度に少し交わす会話が毎回楽しみになった。

彼女は僕と同じくらいの年で、決して大きくはない家にひとりで
住んでいた。長く通ううちに僕は色々なことを知った。両親は亡く
なってしまう、日雇いの仕事で生計をたてていること。花の世話を
するのが趣味で日課でもあること。僕が届ける花を楽しみにしてく
れていること。

確かに家に比べて庭は広かった。日々華やかになっていく庭を見
るのが、僕も好きだった。

ある時、いつものように配達に訪れると、彼女が庭園の傍で屈ん
でいた。どうしたのかと尋ねると、彼女は泣きそうな顔で地面を指
差した。

「ひどいわよね。あの人達、こんなにきれいに咲いている花に気付かない」

「あの人達？」

「兵隊さん。そろそろこの町にも来るようになって」

当時この国は隣国との戦争中だった。国境から離れた僕らの町には大した影響もなかったのだけれど、次第に町の中で武装した兵士の姿を見かけるようになっていった。僕もひよっとしたら駆り出されるかもしれない、そうしたら彼女とはお別れなんだ。そんなことを思ったのを覚えている。

僕は黙って、踏みつけられた花を見下ろすしかなかった。彼女はただ俯いていた。

そんな彼女との別れは唐突だった。僕が徴兵されるより先に、彼女の方が町を出て行ったのだ。

よく晴れたある日。配達に訪れた僕に向かって、彼女はいきなり別れを告げた。

「わたし、旅に出ることにしたわ」

「旅？」

「そう。この戦争を終わらせるのよ」

僕ははじめ、冗談だと思った。でもきらきらと目を輝かせている彼女を見て、何か方法があるんだろうなとぼんやり考え直した。彼女はすごいことを言っているのに、まるで子供のように嬉しそうだった。嬉しそうに僕に夢を語ってくれた。腕の中に、一冊の分厚い古書を抱えながら。

「これがあれば戦争は終わるわ。もう銃声に怯える必要はなくなるし、食べ物だって兵隊さんにとられなくて済む」

「君ひとりで大丈夫なの？」

「ひとりじゃないわ、きつとね」

そして宣言通り、翌日彼女は旅立った。

「帰ってきた時には戦争は終わっているはずよ。そうしたら、たくさんの花を育てられるわ。この町いっぱい」

僕は配達に行くことはなくなっただけど、彼女が懸命に世話をしていた庭園だけは守ろうと思った。帰ってきた時に雑草だらけの庭は見たくないだろうなと思ったから、たまに彼女のいない家に行っては花の世話をした。

やっぱり寂しかった。彼女のことはいっただって心の中にあつた。

だから戦争終結の知らせを受けた時、僕は真っ先に彼女の顔を思い浮かべた。きつとこれでまた会えるんだと。

旅立って数ヶ月、彼女は町に帰ってきた。特に変わった様子はなく、出発した時と変わらない姿で。

身寄りのない彼女の旅のことは僕と近所の人ぐらいしか知らなかったし、町も戦争が終わったことで浮き立っていたから、僕らはちよつと話を交わしただけだった。彼女は何も語らなかつただけど、僕はまた彼女と話ができるだけで嬉しかった。彼女は僕が世話をし続けた庭を見て、とても喜んでくれた。

……けれど。町いっぱい花を咲かせる夢も、原っぱで昼寝する夢も叶わなかつた。

旅から帰って三日後、彼女は死んでしまったのだ。

発見したのは隣に住むおばさんで、彼女はベッドの上で眠るように亡くなっていたそうだ。安らかな顔をしていたと聞いて、少し救われた。

僕は前の日も彼女と会話したばかりだった。薔薇を届けると、微笑んでお礼を言ってくれた。

ひっそりとした葬儀の時も埋葬の時も全然実感なんて湧かなかつたのに、彼女が眠る墓所に向かっている今になって、ようやく悲しみが込み上げてきた。腕の中の花束を抱き締め、地面を見つめて黙々と丘を登る。たくさん話したいことがあったのに、伝えたいことがあったのに、彼女はもう存在しない。せめてお墓の前で話したら、彼女は聞いてくれるだろうか。

彼女には親戚がないようで、葬儀もとても寂しいものだった。だから僕は彼女の墓標の前に誰かがいるのを見つけて、思わず声をあげそうになるくらいに驚いてしまったのだ。

長身の、黒衣の男が立っていた。向こうも僕に気付いたようで、ふと彼はこちらを向く。若い男の両目は珍しい紅色をしていた。肌も白かったけど、色素が薄いわけではないようで、髪は艶やかな黒色だった。

そしてその男性は、本当に美しかった。今まで美しいという言葉で称してきた全てのものが陳腐に思われるくらいに、この世のものとは思えないほどの美貌。憂いを帯びた切れ長の瞳と目が合った瞬間、何故か背筋がぞくりとして戸惑った。

「あの……貴方は？」

黙っているのは失礼だと思ったが、それだけ聞くのが精一杯だった。

「私？ 私は……彼女の死を看取った者だ」

「看取った……？」

彼女の死体を見つけたのは隣人のおばさんのはず。どうということだろう。

「君は彼女とは」

「ぼ、僕は……ちょっとした知り合いです」

「そう」

彼は再び墓標へと視線を落とす。動くきつかけを失ってしまい、僕はただそこに立っていた。

「……三日だけ、待ってやったんだ」

「えっ？」

ぼつりぼつりと黒衣の彼は語り始めた。

「せっかく故郷に戻ったのだからと、私自身の気紛れでな。それに庭の花を嬉しそうに見ていたから、少しだけ待ってやることにした」

待ってやった。三日だけ。

唐突に僕は何もかも理解した気がした。恐らくは、目の前の彼女が彼女を。

でも不思議と責める気は起きなかった。僕なんかより、彼の方がずっと悲しそうな顔をしていたから。墓を見つめて佇む男は、多分神様とは対極にある存在だろうに、むしろ神々しくさえ見えた。

「最初からそういう約束だった。彼女は何もかも覚悟の上で私の力を求めた。こうなることは互いにわかっていたんだ」

「……………」

「だが……本当に正しかったのだろうか」

……ああ、そうか。だから彼女はあんなに楽しげだったんだ。だから目の前の彼はこうも彼女の死を悼んでいるんだ。

「……悪魔も、人間を好きになるんですね」

僕の言葉に彼は薄く笑んだ。

「さあな。人云々ではなく心に魅せられたのだと言っても、今更言い訳にしかなるまい」

悪魔、と言われて彼は返事をした。僕はただ納得する。怖いというより、彼の悲しみに満ちた表情を見ているのが辛かった。柔らかな光の差す丘で、自らが手にかけた女性の墓の前に、うなだれるように立つ男。その光景は下手な絵画なんかよりも美しく、同時にこの上なく痛々しかった。

「……道は間違っていないのに、迷子になった気分だよ。私は何度も確認した。それでも彼女は対価を支払うと言って憚らなかつたんだ。だから最後に贈り物をしたと思った。彼女に相応しい安息を……傍で見守ってやるうと」

対価。その単語を口の中で転がしながら、僕はただ彼の静かな告白を聞く。

間違ったことは何もなかったはずなのに。彼も彼女も約束を守つただけ。誰も悪くない。それでも敢えて悪者を挙げるならば、恐らくは。

彼は何に対してかかぶりを振り、穏やかに微笑んだ。

「意志ある者は斯くも愚かで……美しい」

ふわっ、と風が吹く。

瞬きをした時にはもう、そこには彼はいなかった。僕は彼とは二度と会わないだろうな、と直感的に思った。

僕はゆっくりと彼女のお墓に近寄った。そうして、持ってきた花束を捧げようと思ったのだけれど、そこには既に供え物があった。

……それは僕が最後に彼女にあげたのと同じ、紅い薔薇。たった一輪だけ。

薔薇か、と僕は呟く。刺があるし世話は難しいし。でも彼女はこの花が特に好きだった。

一輪の花の隣にそつと花束を置き、跪いて彼女のために祈りを捧げる。それから顔をあげ、平和な町を見渡した時、彼女がいなくなつてから初めて僕は泣いたのだった。

コビト作りのススメ

まず材料を用意します。

欠かせないのは『コビトの素』。これがなければ始まりません。白色の粉末で、ホームセンターやデパートで手に入れることができます。高価な国産よりも、オーストラリア産の方がバランスの良いコビトができるようです。

次に大量の『水』。水道水で構いません。塩素の臭いが気になるようであれば、ミネラルウォーターや蒸留水を用いてください。

基本的にはこれだけです。あとは好みの『調味料』と『毛』があるといいでしょう。『毛』は毛糸などでも毛髪でも大丈夫ですが、あまりカラフルな毛糸ですと、やや性格がアグレッシブになるという統計が出ています。毛髪をお使いになる場合は、あらかじめよく洗っておいてください。

器具は『鍋』、混ぜる用の『へら』だけで足りません。出来たてのコビトは裸ですから、産湯用のお湯とタオルもあれば便利でしょう。尚、鍋は金属性のものが適しています。土鍋等は途中で液が外部にしみだす可能性がありますので、ご注意ください。

では作り方の説明です。

最初に、鍋に水と『素』を入れて火にかけます。割合は水：素がおよそ3：1が目安ですが、焦げ付くのが不安な初心者の方は少々水を多めにしても問題ありません。

そしてひたすら混ぜます。器具に厳密な規定はありませんが、『へら』、特に『木べら』で攪拌しますとよりもち肌なコビトになるようですので、ここではおすすめております。

液にとろみが出てきて、透明度が増してきたら、ここで『調味料』

と『毛』を加えてください。言うまでもないことですが、調味料は入れすぎないように注意が必要です。しょっぱい顔にせよ甘いマスクにせよ、ほどほどの味付けがちょうど良いのです。このさじ加減でコビトの顔が決まりますから、慎重になるべきでしょう。

また調味料とは違い、毛を加えるかどうかは任意です。中には全身ツルツルのコビト、俗に言う『ケナシビト』を愛好するマニアックな方もいらっしゃるようですが。そういう方はこのプロセスは飛ばして頂いて結構です。

さて、材料を全て加えたら再び混ぜてください。ここで焦げると今までの苦労が台無しになってしまいますから、お気を付けください。コビト作りには根気強さと繊細さが必要です。

攪拌は1時間程度が理想的ですが、時間のない方は強火で30〜40分でも大丈夫です。だんだんと気泡が大きくなってきたら、最終段階へと移ります。

そろそろ単なる沸騰とは異なる、大きな泡が中央にできるようになっていくでしょうか。出来ていない方はもつと攪拌を続けてください。その大きな泡が『ポンツ』という音を出して弾けた時が合図です。そのタイミングで、鍋を火からおろします。これを逃さなければ、あとは放っておくだけでコビトの形が出来てくるはずです。

風呂に入れてやるもよし、手作りの洋服を着せてやるもよし。どうぞここからコビトとの素敵な生活を楽しんでくださいね。

(出来たコビトの性格及び外見に関して、当方は一切の責任を負いません。また出来たてのコビトは大変壊れやすいので、取り扱いには充分注意してください。)

《困った時は……》

Q. 『コビトの素』が袋の中で固まっているのですが。

A・恐らく湿気が原因かと思われます。そのまま使って頂いても問題はありますが、やや偏屈なコビトができるかもしれません。

.....

破壊者

「十五の年、君を迎えに行こう」

それが決まり。それが彼の吐いた虚構の真実。

「それまでにいい女になるんだよ」

楽しそうに笑って、彼は彼女の背を押した。

赤茶けた大地。岩と砂の荒野に二人の男が立っていた。少し高くなつた場所から眼下を見下ろしていた。

片方は黒いフードを被っていて顔がよくわからない。もう片方、やや長身の方は端正な顔立ちをしている。作り物のようにとおつた鼻筋、桃色の薄い唇、そして硝子玉と見間違ふ瞳は大地と同じ赤茶色。男の外見には非の打ち所がなかった。美という言葉は、この男それだけで説明可能だと思ふ程に。

美しい男は長い金髪を束ねて背中に流し、ブーツの先で石を転がしていた。

「よろしいのですか？」

「ん、何が」

フードの男が恐々と金髪の男を見上げる。上下の関係は明らかだった。

「ですから、あの少女のこと……」
「ああ、あれね」

金髪の返事はあくまで素っ気ない。彼はふと目線を下に移した。何も無い荒野。つまらない、とばかりにため息を吐く。

「もう約束の時間は経ったって、そう言いたいのか？」

「はい」

「いいんだよ、まだ」

「は？」

「まだだ。宴までは待つつもりだから」

「ですがそれでは……」

金髪は懐から一枚の紙を取り出し、慌てるフードに見せた。それは、契約書、だった。

「僕はちゃんと言ったんだよ、本人にも。“君が十五の年は《更新》の年に近いから、気が向いたら宴に招待してあげる”って。それにほら、ここにも」

細い指が紙を示す。フードは必死に目を凝らし、ややあつてから小さく声をあげる。

「……あの」

「なんだい？」

「恐れながら申し上げますが、字が小さ過ぎるのではないかと。契約者は気付いたかどうか」

「いいじゃないか、書いてあるんだから。サインはもらってあるし」

反省。後悔。そんな言葉は知らない。そう言わんばかりに金髪は

肩をすくめる。

ぬるい風が吹く。小さな男は慌ててフードを押さえた。

「それにそんなに悪いことじゃないだろう？ 長生きするのが嫌だなんて、贅沢は言わせないつもりだよ。だってさ、」

男の唇が弧を描く。瞳の色が、蒼色に変わる。

「彼らは本能的に生を求めるだろうし。そうなるように定められてしまったから……“彼”のおかげでね」

“彼”？」

「僕の大好きな友人さ。彼の才能と力量には惚れ惚れするよ。僕にもできなかった悪徳をやつてのけたのも。彼はね、神がお創りになった人形に最高の贈り物をしたんだ。それは “死” と呼ばれているけれど」

フードの男は小心なのか、ごくりと唾を飲み込んだ。だが金髪の男はずっと楽しそうにしている。いつの間にか両眼は燃えるような赤色。顔をあげたフードの男は赤い眼を見て、数度まばたきした。

「何が楽しくて生きるんだろうね、彼らは。見ている側としてはとても面白いけどさ」

カン。

ブーツの爪先が石を蹴飛ばす。放物線を描いたその行方は見届けず、長身の男は傍らの小男を見下ろした。

「飽きたね」

「は？」

「長く生きてるとねえ、たまに刺激が欲しくなるんだよ」

小さな従者はわかったようなわからないような顔。それでも主は
気にならないらしかった。

「《更新》は予定通り行う。それまでは僕も我慢するよ。もちろん
君もね。なに、少しの辛抱だ。もうじき、世界を壊せるのだからね」

「は、はあ……」

「平和は弱体化と同義。安穩とした世界は、進むことを忘れた脆い
模型だ」

「……………」

金髪の男は欠伸をひとつ。瞳は元の赤茶色に戻っている。彼は黒
衣を翻して踵をかえす。束ね髪が柔らかく揺れた。

「……………さてと。暇だし、また街をひとつ潰してこようかな」

フードの男は慌ただしく追いかけていった。

僕、考察。

小さい頃に生き物を飼ったことがある人は多いと思う。

犬、猫、ハムスター、小鳥。ザリガニやカメなんかもある。

例えば、金魚なんてのは皆飼った経験があるのじゃないかな。お祭りに行くワクワクするよね、金魚すくい。おじさんに数匹入れてもらったビニール袋を、たぶたぶいわせながら持ち帰る。ちよつと渋い顔のお母さんも、結局は“ちゃん付け”で可愛がっちゃったりして。

もちろん世話は楽じゃない。けど、僕が問題にしたいのはそこではないのだ。

僕も金魚は飼ったことがある。餌やりも水替えもしたし、病気の時は薬もあげた。とても可愛がったんだ。

でもね。

死んじゃった後、その死体に触れるのだけはどうしても嫌だった。たまにいるじゃない？ 魚は触れませんって子。ぬるぬるやだあ、とか言つて。僕はそんなことなかった。魚はもちろん、爬虫類も両生類も素手で触れる。

なんでかな。

ちよーつと考えてみたんだけど、よくわからない。そもそも意味付けしようとするのが無駄だったりして。そんなこと言わないで、ね。

で、思ったんだけど。僕はきつと死が怖かったのじゃないかなって。

よく考えてみる。だって、切れた電球に触るのは怖くない。短くなった鉛筆ならむしろいいとおしい。壊れた人形だって……それは、ちよつと怖いけど。

つまり、さ。元々あったものがなくなるのが嫌なんだよ。元はあった金魚の命が失われるのが怖い。どう？ それらしいよね。

色々言ってきたけど結局僕が何を言いたいかって、それは動物の世話は大変だよってゆーことなのです。

シアン、マゼンタ、イエロー

言葉にするのもおぞましい。暗く汚ない色を塗りたくった、まるで怪物。

私はカンバスの上をしげしげと眺めてから、自分の手をじっと見下ろした。絵とは似ても似つかない、白くて華奢ともいえるくらいの手。完璧な造形の手。

窓から朝日が差し込んだ。傍らのベッドに眠る男が眉根を寄せる。私は待った。男の目が覚めるまで。

やがて目を開けた男は私の姿を見るなり、盛大な音と共にベッドの柵にぶつかった。私はただカンバスを指差して、

「お前が描いたのか」

と問う。実際は聞くまでもなく、床に散乱した画材を見れば明らかだったが。放り出された絵筆に様々な色のチューブ。足の踏み場もない。

何度も何度もうなずく男は明らかに怯えていて、怯えるくらいなら描くなと眉間に皺を寄せる。こんな 化け物が、悪魔だとは。呆れ果てて笑えぬ。

「お前の絵の腕を認めたから来てやったというのに」
「へ………？」

貧しい身なりの男はぽかんと口を開け、私を頭から靴の先まで眺め、しばらくしてからやっと

「あ、あの……誰、いや、どちらさんでしょうか……」

と呟いた。この際それはどうでもよかるつに。

「私は魔界を統べる者。闇夜を照らす責を負う者」

「……！」

少なからず勉強はしているようだから、これだけ言えば私の名はわかるはずだ。目を白黒させている人間を一瞥し、聞こえよがしに嘆息する。

「まったく……。先にも言ったが、私はお前の絵に惚れたから来てやったのだ」

「は？ え？ ほ、惚れ……っ」

「この筆遣い、色の重なり、……」

絵をなぞる。指の腹に感じる塗料のざらつきが心地好い。色を置いてから大分経っているようだな。

「……そして何よりお前の絵に対する姿勢」

掃除する努力もとうに放棄されたかのような室内。画材で汚れ、継ぎはぎだらけの服。なりふり構わぬ男の周囲の中で、しかし唯一、絵を描く道具達だけは生気を失っていない。

そのまま画架の木枠を指先でなぞる。埃は、ついていなかった。

「人間にしては良い仕事をする。せつかくこの私が見込んだ男が、人間世界の金や欲という小さな枠組みに縛られているのは惜しい」

そのような下らないことのために、才能が没してはならないのだ。

私との出会いは恐らく、この小さな人間が望むものを与えるだろう。
……だが。

「お、俺の絵を認めてくれるんですか?!」

「……………」

「あのお……………」

「……………とりあえず、」

ベッドに座る男に顔をずいっと近付ける。身を引くよりも早く腕を伸ばす。

耳を、つまむ。

「お前は悪魔をこのように描くのか」

「え?…………… あいたっ!」

この醜悪な化け物が、悪魔と。それならば、教えておかねばならないことがある。

「よく聞け、人間。我らの存在理由を勘違いするな。我らは気高く美しい。剣をとり世界に立ち向かった我々には勇気があった。知恵があった。願いがあった。それらは何ら差別されるべきではない」
「あだっ……………わ、わかりましたからっ」

片耳を引つ張っていた手を離してやると、男は涙目になりながら私を見上げた。そんな男に私は指を突き付け、命じる。

「この絵が世に出たらただではおかないからな。本当に認識が変わったのであれば描き直せ。今すぐに」

先刻は男が座っていたベッドに腰掛け、私は目の前の男を眺めていた。

木製の簡素な椅子に座り、カンバス越しにちらちらとこちらを見ては、何かを思索し、少しずつ筆を動かす。その繰り返し。

「あ、動いても大丈夫ですよ」

「……そうか」

軽く投げられた言葉に首を回す。僅か気を緩め、窓の外を見た。日が高い。飲まず食わずでよくも集中できるものだな。

「……俺、初めてです、こんなの」

ぼつりと、色を混ぜながら男が言う。

「俺の絵を好きだって言ってくれて。しかもわざわざ訪ねてくれる人が……あつ、人、じゃなくて……」

「誰にでも私達と出逢う機会があるわけではない。お前の絵が私の目にとまった。ただそれだけだ」

どこでこの人間の絵を見たのだったか。それは定かではないが、ともかく、こいつが描く絵は私の好みに合っていた。

だのにこいつとききたら毎日毎日乞食のような生活。人間は脆いから、灯火は儂く消えよう。それが、何となく惜しかった。

「……絵って、」

明るい調子で男が切り出した。私は閉じていた目を薄く開く。

「なんか、人間に合ってる気がするんです」

「……ほう？」

私に人間を語るか。少し興味をそそられて、暇潰しに聞いてやろうと座り直す。

「絵が、人間に？」

「は、はい。あの……三原色ってありますよね」

頷く。

「光の三原色は混ぜたら白になるらしいですけど、絵の具はそうじゃないんですよね」

全く別の三色。全ての色を生み出す根源。鮮やかな色……しかし混ぜれば。

「黒、か」

「はい」

だからだろう、絵の具は多くの色を混ぜることには向かない。ただ闇色が増すばかり。……如何に美しい色を混ぜようとも。

「して？」

「え、えーと……変だとか、思わないでくださいね？」

何を今更。返事の代わりに鼻を鳴らした。男は照れくさそうに齒を見せる。

「その、たくさんの方が人との縁みたいだなんて。最初は白くても、色んな関わりの中で人間は成長していくから。混ぜた色は黒からは二度と取り出せないけど、黒の中には確かにたくさんの方が入っているでしょう。だから人って絵の具みたいだと思うんです」

そう言っただけで男はまた照れ隠しするように笑った。

正直、少し驚いた。私には人間の年齢などわからない。単に幼い、それだけなのだが。人形も成長するというのか。

「……なるほどな」

本当に感心して呟いた。そして……私もこの男も、きっと。

やがて日が暮れ、ようやく男は筆を置いた。

「出来たか？」

「ええ」

何も口に入れていなかったからか、疲れたような表情をしている。しかし同時に満足げな様子も伺え、期待できるだろうかと思った。

「仕事が速いな」

素直に言えば、

「だって命懸けですもん」

と肩をすくめられた。誰も捕って食いやしないというのに。……土塊なぞ食ったところで美味くもなんともないからな。黙って向けられた画架。その絵。

「……………」

「どう、ですか…?」

「……………悪くないな」

「よっ、良かった…………!」

闇夜に浮かぶ青い月、下部に置かれた紅蓮の炎、そして僅かの光明。種々の色が溶け合う大地に佇む…………悪魔。天使よりも神々しい美しい姿。これならば外へ出してもいいだろうと思った。

「確かにまともになったな」

さすがは私の見込んだ男。悪くない。全くもって悪くない。

…………さて、そうなるよ。

「…………今回の仕事は仕舞だ。帰る」

「へっ?」

もうここに用はない。今回の機会は終わったのだ。次に私がこの男と会うのは恐らく…………こいつにとってはずっとずっと先のことだろう。

「お前の灯は前よりも明るくなったようだな。既に光明の兆しが見える」

「……？」

「今はわからずとも良い。いずれ、再び出逢った時に話してやる」

再び、ここではない場所で逢った時に。曖昧にうなずいた男を横目、私は立ち上がる。少しだけ、愉快的な気持ちだった。

「よく聞け」

椅子に座った絵描きを見下ろし。ふっと口端を吊り上げた。

「お前の手は我らを喚ぶ。せいぜい精進せよ、人間」

……あの時その男はうなずいたはず。だがその後の生に関しては、私は何も知らない。後世に語り継がれるような偉業を成したか、はたまた当初の予定通りに早々に世界と別れたか。いつぞや再会した時も、当然、向こうは何一つ覚えてはいなかった。

……ただ。

目の前の壁に掛けられた一枚の絵。私の宝物のひとつ。これを見る度に、私は自分の色に思いを馳せる。そしてその絵に描かれた月の青さ、炎の紅、闇の濃さに、私はひどく満足しているのだ。

三日月パンに捧ぐ愛

わたしはクロワッサンが好きだ。食パンより、メロンパンより、シナモンロールより、コロネより、アップルパイより。パン屋に並ぶ商品の中でいちばん好きなのだ。

三日月、の意味だったろうか。そんなことは、どうだっていいのだけれど。歴史とか製法とかに興味はない。ただクロワッサンが、クロワッサンを食べるのが好き。

パン屋でクロワッサンを買わなかったことはない。特に初めて行く店では、必ずプレーンのそれを買ってくる。わたしはこのパンこそに店の全てが現れると、思っている。

甘い蜜でコーティングしてあるものも、ちよっぴり塩味が効いたものも、チョコレートを巻いたものも好き。ただし、バターをたっぷり使ったあるパイ生地でないため。デニッシュ生地を三日月形にくるくる巻いたからといって、わたしの中ではそれはデニッシュに他ならないのだ。

買ってきたクロワッサンは、その日のうちに食べるのがよろしいでない、サクサクとした歯触りが失われてしまう。欠片がこぼれるあの食べにくさこそが、クロワッサンのクロワッサンたる所以だと思っただけだ。

どうでもいい話なのだが、友人が以前、クロワッサンという綴りは、黒井さん、に見えると言っていた。本場のスペルを眺めながらなるほどと思っただけ、別にそうは見えないとも思っただけ。

本当に、下らない話だ。

例外になりかけた話、それが手掛かり

自分が持っていないものを有する相手に惹き付けられる。それは
どうやら本当らしいね。

……おや、失礼。僕としたことが、君みたいに面白い存在を捉え
損ねるとは。歓迎するよ、愉快で愚かなお客さん。

ああ、気を悪くしないで。褒め言葉だよ。

そういえば前にも会ったよね。君は運がいいな。数ある世界の中
で、この僕と二度も言葉を交わせるなんて。

……覚えてないのかい？ いや、謝らないでいいよ。君が愚鈍
なのは良く知ってるんだから。

僕は多分、全てのものと同じ空間に存在したことがあるんだ。で
もこうして出会うのは貴重なことなんだから、今度はちゃんと覚え
ておいてよね。

さて、せっかくの縁だから、僕自身の話をしてあげるよ。聞きた
くなかったらいいんだけどね、聞かなくても。

……聞く？ そう。

まず、僕の名前を教えてください。たくさんあるのだけど、そう
だな、いつも通じる役割の名前があるんだ。

僕の名は《輪廻》。り、ん、ね。そうそう、それだよ。

前の僕？ 生まれ変わった僕？

愚鈍な君がしそうな問いだよ。期待を裏切らないね。

僕は転生がどうか、全く気にしないし、する必要がないんだ。だって僕は《輪廻》そのものなんだから。

死ぬけど、死なない。本当の意味で生き続ける、前に進み続ける。だから僕は今までに見た全てを覚えている。知らないのは、今も生まれ続けている世界のことだけさ。

でも、僕は《世界》にはなれない。

んー、色んな《世界》と出会ってきたよ。僕を弾き出そうとした子も、恐がって扉を閉めた子もいた。そういう子達にとっては、僕は《破壊者》だったのかもしれないね。まあ、恐れようが恐れまいが、僕が《破壊者》である事実には違いはないけれど。輪廻が破壊だつて意味、どうせ君はわかりっこないだろう？

……今？

今の《世界》とは友達になれたよ、嬉しいことに。僕を受け入れてくれた、物分かりのいい子だ。

まだ少し若いけどね。物事の準備の大切さとかを知らないから、教えてあげることがたくさんある。

ああ。開宴が迫っているな。

今回は調子がいいから、少しだけ豪華な宴にしてあげるよ。だから君もくるといい。

なんでって？ 最初に言ったじゃないか、僕は君みたいに愚かで脆弱なモノが大好きなんだよ。自分とは正反対で。

僕は主催者だからね、君は正式に招待されたんだ。良かったね。

僕は招かれざる客は消すつもりだから。でもひとつ言っておくけど、主演は僕でも君でもない。……ふふ、後はお楽しみだよ。

さあもう行かなくちや。じゃあまた、宴で会おうね。

冬の少年

雪が、降っていた。

綿にも似たそれは通りの木には重たげに積もり、家々の屋根を白く染め、街全体を砂糖菓子のように彩っていた。

曇った窓。煙突からもうもくと立ち上る煙。大人達は皆暖かな暖炉を思い、外套の襟を寄せ家路を急ぐ。

だがその大きな足跡に混ざって、白の大地に乱雑に刻まれた小さな窪みがたくさん。いくら雪が緑の芝生を覆い隠そうとも、そこは彼らのいつもの遊び場に違いなかったのだ。

彼は雪玉を丸める手をふと止めて顔をあげた。

今日も来てる。

視線の先、小さな民家の軒先にひとりの少年が座っていた。いつからかは覚えていない。けれど彼らが遊んでいると、いつの間にかその少年が同じところに腰掛けて、こちらをぼんやり眺めているようになったのだ。茶髪の彼自身も含めて近所で漆黒の髪はその少年だけだったし、一面の雪景色に慣れた目には、その真っ黒な髪の色が余計に印象が強かったから、遠くからでもすぐにわかった。

こっちは来ないのかな？

少年はいつもただ眺めているだけだった。そして、いつもひとりだった。気が付けばそこに居たし、遊び疲れて帰る頃に見れば消えていた。

だがその時。

彼の見ている前で少年が唐突に立ち上がり、彼らがいるのとは反対方向へと歩き始めたのだ。家族が迎えに来て温かなスープの用意を告げるでもなく、少年はひとりで立ち上がり、ひとりで踵を返した。

それをぼんやりと眺めながら、友人に投げかけた雪玉を手に留めた彼は僅かに迷い、やがて少年の方へ駆け出した。立ち去ろうとする少年の前に回り込み、その腕を掴んでにかつと笑いかける。そしてそのまま硬直している少年の手を引っ張り、遊びの輪へと連れ込んだ。

名乗る必要も互いを気遣う必要もなかった。ただ楽しく遊ぶために集まった仲間だったから、飛んできた雪玉が挨拶代わり、彼らは日が暮れるまで遊んだのだ。

雪原を駆け回り疲れ果て、白い息を吐きながら寝転がった子供達は、上から覗き込んできた少年に目を奪われた。

だらしないな。

黒い髪をした彼はそう言いながら、見たことのないくらい優しく微笑っていた。

その少年は冬の似合う少年だった。凍てつく寒さ、厳しさが唯一その存在を受け入れたような、まるで冬の精霊。彼を遊びに連れ込んだ張本人は、周りと同じように息を切らしながら灰色の空を見上げる。そうして冬空から舞い降りた精霊の、深緑の双眸を見つめ返した。きれいだと、ただ彼は思った。ただ、純粹に。

雪が、降っていた。

綿にも似たそれは通りの木には重たげに積もり、家々の屋根を白く染め、街全体を砂糖菓子のように彩っていた。

街も、そして森も。

一面が白の森の入り口には、二頭の白馬とその主人達。腰には剣、外套に刻むは聖なる十字。

いつも笑っていればいいのに。

改めて目の前の男を見て、かつて少年だった青年のひとりと思う。鋭く、端正な顔立ちでは無表情や怒りの表情が余計に苛烈なのだ。特に冬のような空気を纏っていては。

片方に見つめられていることに気付き、慚然としたもう一方の深緑の瞳が細められる。後ろで無造作に束ねた髪色は、黒。

「私の顔に何か？」

「いいや」

茶髪の青年は肩をすくめると、外套の襟を寄せ直す。天上に最も近いと言われるからか、否か。ここの“聖都”の冬は冷えるのだ。油断してはすぐに体の自由を奪われる。

「……相変わらず寒いな」

「当たり前だろう、冬なんだから」

「それは、そうだが」

言えば即座に返答がある。身も蓋もない。雪に吸い込まれることもない冷涼な声は、嫌味なほどはつきりと凍える大気を震わせた。

「……それとも怖気づいたか？ 私がひとりで“討伐”してきてもいいんだぞ」

微笑みからは程遠い、小馬鹿にしたような表情で男は言う。男は、他人を苛立たせるのがとても得意な人間だった。昔馴染みの友相手でも然り。

「馬鹿言え。俺がいなかったら仕事にならんだろうが。いつもいつも余計なことに首を突っ込みやがって……少しは自覚持てよ。というか、俺の身にもなれ」

「はいはい、漸く就いた副長の座は大事にしますよ、隊長殿」

隊長、と呼ばれた茶髪の青年が、不機嫌そうに更に眉間の皺を深くした。髪と同じ茶色をした眉がびくんと跳ねる。

「それだけじゃ」

「さあ、早く行こう。寒い」

黒髪の青年は至極あっさりと上司の言葉を無視すると、そのまま馬を進めようとする。

言うことを聞かない部下を物言いたげに睨み、やがてため息ひとつで堪えた隊長。怒るだけ体力の無駄だ。傲慢不遜な態度……傍目にはこの上下関係、どのように映るだろうか。

「……だが」

「あ？」

だが。背中越しに投げられる逆接。白馬は歩みを止めないが、それでも。

「まあ確かに、私達が“当主”なのはお互い様だからな。少しは気を遣うさ」

上着と手袋は同じでも、そのいずれにも記された紋章は異なる。それは彼らの家紋。受け継ぐ血筋の鎖。

「お前の少しは、限りなく無に近いがな」
「煩い」

仕返しとばかりからからと笑ってやれば、そっぽを向いた男の黒髪が揺れた。ぶつきらぼうな物言いはずっと変わらない。美しい精霊かに見えた少年は、確かに冬が似合う男ではあったが、やけに自信家な青年へと成長した。傍でため息を吐く青年の役割はまた、ずっと変わらないけれど。

「早く行くぞ。顔が痛くてかなわん」

冬だからと言ったくせに寒いと不平を洩らす細い背を、隊長であるはずの青年はゆっくりと追う。蹄が踏むのは獣道。馬を並べることは難しい。ましてわざわざ追い越すことは容易ではない。

「なんだ、お前の方が嫌がってるじゃないか。帰るなら今のうちだが？」

「ふん、嫌に決まってるだろ。何が楽しくてこの寒い中、化け物相手に野郎ふたりで剣を振り回さなきゃならないんだ。大体、こんな真冬に動く“魔”が忌々しいことこの上ない」

「……だが、人間だって冬場に活動するだろうが。夏の暑さより、案外冬が好きな奴は多いんじゃないかな。暑いと動きたくなくなるしな」

先に行く男がわずかに振り返る。いつもは平淡な無表情を貼り付けている彼が、とても意外そうな顔をしていた。

「……貴様は時々、馬鹿みたいなことを馬鹿みたいに真面目な顔で言う」

「馬鹿馬鹿言うな」

滑らかな白い大地に刻まれていく足跡は二頭分。ふたりの言葉も雪と共に落ちていく。

「全く……。貴様みたいな奴と“双璧”と称されるなんて、もううんざりだ」

「それはこつちのセリフだ。違う時代に生まれたかったよ」

「それは何世紀の話だ？ 生憎だが、私はこの先数百年は生きるぞ。貴様より長く長くな」

「言っとけ」

憎まれ口もどこまで本気か。少年時代の時間が、今もそこにある。無表情と呆れ顔の口元は微かに笑みを作っていた。

「なあ、お前、冬は嫌いか？」

その質問をすることもされることもわかっていたように。唐突な問いかけにも、空気は揺らがない。そして彼の答えも予想通り。

「嫌いじゃない」

少しばかりひねくれた彼の、精一杯の好意の現れ。好きだなんて、言わない。

「……貴様は」

「ん？」

「貴様は冬が嫌いか」

ひねくれ者。にたりと笑った青年もまた、そうなのかもしれなかった。

「嫌いじゃないさ」

雪に閉ざされた森の中、彼らの仕事が始まる。

春は、まだ先か。

色に溺れた彼らの話

【彼、曰く……】

何だ、こんなところまで訪ねてきて。話が聞きたい？ 何故、私に？ …… ああ、あいつらのことか。懐かしい話を…… 確かにそれは私に聞きたくもなるだろうよ。だがな、私とあいつらとでは理由が違うのだ。“墮ちた”理由が。

調べているなら、少しくらい噂に聞いてはいるだろう？ あいつらは人間に惚れたがために白き翼を失ったのだ。人間の誘惑に屈したのだぞ？ これ以上の愚行があるか。

人間がただの獣ではあり得ないという言い分は、認めてやろう。愛が強過ぎる感情であり欲望であることも。しかしそれにしただってあいつらは天の使いだった。大切な仕事があったのに、よくも“あの方”を裏切るような真似を。しかも人間に誑かされた挙げ句！ 私には信じられないな。

……何？ 知識…… ああ、ああ。そうだな、あいつらが種々の知識を地上へもたらしたことは事実だ。戦争、化粧、魔術、医学、墮胎。数え上げれば切りがない。中には上位の天使であるという特権を使つて、“あの方”の秘密を持ち出した者もいたらしいな。何とということをも！ まあ、それよりも人間が愚かだったからな、利用されることはなかったようだ。

そう、その通りだ。所詮は使い手次第なのだよ、知識などというものは。何？ おかげで洪水があつた？ 知ったことではない。それぞれの獣のつがいがあつただけ、慈悲があつたと思うがよからう。確かにあいつらはとんでもないことをしでかしたが、全てをあいつらの責任とするのは傲慢というものではないかね？

【或いは、彼、曰く……】

おや、ようこそ。どうしました？ ……僕に、彼らの話を？ ああ、いえ、構いませんが。本に、まとめるのですって？ それは変わったことをなさるなあと思って。

そうですね……。僕個人の意見でいいのですよね。彼らがしたことは、許される行為ではないと思います。その後で本来は罪なき人間を争わせねばならなかったのですから、我々天使も少なからず手は被ったのですよ。まして“あの方”の御心の内を思えば。苦痛や落胆は想像に余りある。二度目とはいつても……いえ、何でもありません。

けれど僕は必ずしも否定するわけではない。ふふ、驚かれましたか。貴方がそう思うのもわかりますよ、この立場にいるとね。でもそれなりの意義は見出だせる出来事だったと思います。

だって考えてもご覧なさいな、彼らの何て“自由意志”を感じさせることかを！ 与えられた仕事と己の望み、ふたつを天秤にかけ迷ったのでしよう、悩んだのでしよう。選択の結果はいつだって事実として残るに過ぎない。引き起こした事態は誉められたものではないかもしれませんが、それでも僕は彼らにもまた勇気があったと思いますし、興味深いとも感じていますよ。愛のために全てをなげうつ覚悟があったのでしようね。……なんて。僕は、甘いのでしょうか？

正当防衛

時間保護法なるものが制定されたのは、一体何年前のことだったか。

時間保護法。

端的に言ってしまうえば、《各人に与えられた二十四時間を、他者が必要以上に侵してはならない》という法律だ。

この法律が制定されてから、人々の生活は少なからず変化した。

例えば、聞きたくもない愚痴に延々と付き合わされる必要がなくなったり。学校の朝礼で倒れる生徒は激減したり。待ち合わせ時間に間に合わせる事が恋人同士の間では最優先事項になったし、ファストフードはより速く商品を提供することに全力を注いだ。

最も困っていたのは法案を承認したはずの政治家達であったが、そこは敢えて何も語るまい。

この法律、侵されたか否かが各人の主体的判断に任されているという、法としては致命的な欠陥があるが、それでもこうして受け入れられているのは、それだけ社会が慌ただしくなっている証だろう。本来は“ゆとり”を確保するためのものであったのに。

さて、今ここに時間保護法に基づいた興味深い裁判が行われている。

とある傷害事件。被告はある中年男性。通勤途中の駅の階段にて前を歩いていた会社員の女性を突き落とすという。幸い女性は打ち身等の軽傷で済んだのだが。

男性は、故意に押したことは認めるが、怪我をさせるつもりはなかったと述べている。そして彼の主張はこうだ。曰く、女性は携帯を操作しながら通路の真ん中を歩いていた、自分は快速電車に乗るために急いでいた、よってこれは時間の“正当防衛”だと。

時間保護法のおかげで、議論は平行線をたどった。そしてあつと
いう間に今日が最終日。

裁判官が重々しく口を開く。読み上げられる判決は、果たして
。

Albert

別に、僕が旦那様と初めて出逢ったのは豪華な宮殿の中ではなかった。

僕があの方と初めて言葉を交わしたのは、鬱蒼とした木々の茂る森においてだった。

旦那様　　当時は坊っちゃん、と呼んだりもしていたけれどもは非常に美しい方だった。容姿ばかりではない。滲み出るのは幸いの証、一目でわかる、とても澄んだ心の持ち主だった。

だからこそ、鳥獣によく懐かれるのだろう。勘の鋭い彼らは、僕らよりも相手の内面を感じることに長けている。

僕は、獣の言葉がわかる。獣を好きになるように創られたからそうした能力が発達したのか、それとも最初から得意だったから好きになったのかはわからないけれど。ともかく僕は彼らのことが大好きで、それだけで充分だったから。《樂園》における僕らの役割は、まだ、そこに生きるということだけだったから。

その日も僕は、“友人”達と戯れるために森へ行った。《箱庭》の森にはたくさんの生命が息づいていて、どの命も伸び伸びと懸命に生を紡いでいた。

森の入り口を踏み、呼ぶ。いつもなら彼らが駆け寄ってきて、日

々の出来事を我先にと報告してくるはずが。聞こえてきたのは耳慣れぬひとつの足音、現れたのが旦那様だった。

僕はひどく驚いた。獣達の言によれば、それまで自分以外にこの森を訪れる者はなかったのだ。と同時に、非日常に少し胸が弾んだ。警戒心なんて微塵も抱かなかった。何故なら旦那様は肩に、頭に、手の上に、獣をのせて優しく微笑んでいたから。ほんの吐息で消えそうな儂い笑顔、そのくせ瞳は今までに見たどの獣よりも生き生きと輝いていた。僕が惹き付けられるまでには、そのこと自体を自覚する時間すら必要としなかった。

「これはお前の友か」

うなずいた僕だったけれども、ひとつだけ気になることがあって。

「……その子、高い所が嫌い」

手の上ののった獣が、落ち着きなく前足を擦り合わせて僕と旦那様を交互に見ていた。

「心地いいけど、怖い、って」

「それは、悪いことをした」

旦那様はそつと獣を地面におろした。尚も足に纏わりつく獣に口元を弛め、切れ長の瞳を柔らかく細める。

「お前は彼らの言葉がわかるのか」

再度うなずけば、旦那様は見た目にそぐわないくらい無邪気に。

「私の傍にいてくれないか。お前の話はきくと面白いから」

僕は三度、うなずいた。

旦那様には僕のような能力はなかったが、それは取るに足りないことだった。

お仕えし続けた僕は、第一印象の正しさを確信していった。旦那様はまるで世界に愛されているように、何をしても完璧だった。語れば、その語った言葉が陳腐に思えるくらいに、本当に素晴らしい方だった。生まれてからの年月はむしろ旦那様の方が下なのだけど、僕らなど遠く及ばないほど多くを知っていた。そういう風に創られていた。

尽くした分だけ庇護を得られるのはどこの主従も同じこと。でも僕は少なくともそんな等価交換を求めていたわけではないし、友人達と同じくらい大好きな旦那様の傍にいられるというだけで、こちらの享受が多いような気さえしていた。

やがて旦那様は《箱庭》の頂点に立った。旦那様を見ていればそれは自然なことであったから、僕らは全然驚かなかった。

絶対の序列の、第一位。旦那様はすぐに“皆の”旦那様になった。美しく、才能に溢れた、世界の愛し子。恋慕することさえ畏れ多い、果てしない憧れと羨望の対象になった。

旦那様も周囲の期待には確実に応えた、応えるだけの力量があった。僕もそう頻繁にはあの森を訪れられないほど忙しくなったけれども、泣き言なんて間違っても口にしない旦那様を見ていると、いっそ忙しさが幸福になる気までしてくるのだった。

旦那様はいつも微笑んでいる。いつ見ても幸せそうに、穏やかに。美しい微笑は見る者全てを虜にした。いつしか旦那様の微笑は幻惑的だと噂されるようにもなった。

僕はそんなこと、出逢った時から知っていた。何せ僕自身が旦那様の魅力にとりつかれたのだし。

だからこそ、わかる。

旦那様は、もう以前のような無邪気さを許されなくなってしまった。長になってから好奇心に瞳を輝かせる旦那様を、僕はまだ見えない。

時折、声を掛けて差し上げようかと迷う。

けれど今のところ僕はあの微笑を、いつも通りの微笑を見上げては口をつぐんでばかりいる。友人達はこんな僕らを見て、どう感じるのだろうか？

で？

誰か私に理由をくれ。論破してくれ。でなきゃ叱るだけでもいい。君に問う。それは、一体、何のためだ？

生きている理由が欲しい。

こつ言つと、きつと励ましの言葉が飛んでくるかもしれない。君は君のままでもいいと、言ってくれる人が現れるかもしれない。

待ってくれ。私は言う。そういうことじゃ、ないんだ。

絶望とは無縁……だが疑問に思うのは虚無の印か？

ともかく、私が求めているのはそういう答えではない。

夢がある。進まねばならない道がある、ないにしろ探そうとしている。意欲がある。生きたいと望んでいる。

高まつた願望の頂上で、ふと、放り出された。

全ては、一体、何のためだ？

たくさん勉強をする、或いは才能を磨く、鍛練する。いい学校に入り、いい会社に勤め、やりたいことをやる。

口約束で恋人を名乗り、書類の手続きで夫婦を名乗り、血の繋がりで親子を名乗り、絆なるものを持ち出しては家族を名乗る。

何かを成し遂げるために協力し、ぶつかり合い、共に遊び、語り合い、交友関係を広げていく。

全ては、たった一言で、曖昧になる。

「で？」

それで？ だから何？ それがどうしたの？ 何になるの？ ……

…無垢で冷たい疑問群、一度も抱かなかつたとは言わせない。

否定する気は毛頭ない、むしろ全ての営みを応援している。私も同じ側だから。だから、なおさら。

夢を掴むために頑張る君に問う。その夢は何を生む。誰のためになる。いずれは消える己のためか？ 未来の社会のためか？

導き出した君の答えにぶつけてみてくれないか。「で?」、「と。

具体的に言おう。人の命を救いたい。では救ったからどうなる。

誰かの役に立つ技術を生み出したい。その技術、扱うのは未来の世代だろうか。だとしたら、扱う者が消えた後、そこに残る意味は何だ。心に残る作品を。すると何が起きるのか、そもそも何か起きるのか。働かなければ生きていけない。社会がある以上は自明だが、ならば社会とは如何なるものか。

何かしらの責任を負うことが、生きる上で必要な条件だとして。なるほど、それも一理ある。美味しいものを食べたい、好きなだけ遊びたい、やりがいのある仕事に就きたい、楽しいことをしたい、人から尊敬されてみたい、幸せになりたい。大いに結構、それが自然だ。そしてなんびとが答えられる? 「だから、何?」。

商品、経済、娯楽、競争、人間関係、……ああ、ともすれば煩わしい一切を、一歩下がって眺めた時に。「で?」という疑問の終着点が君には見えているのだろうか。

子孫を残すのが目的だとしても、私からの問いかけは変わらない。どの生き物に対しても、だ。繁殖し淘汰し受け継ぎ進化し、「それで?」。

理由など求めること自体が間違っている、既に生まれたのだから懸命に生きることが我々の役目だ。もしくは。自分が楽しむためだ、生きる目的を探すために生きるのだ、とか。そんなことはわかっている、が、それでは脆すぎる、弱すぎる。

盾として掲げられずとも、剣として示せずとも構うまい。せめて、

せめて寄り掛かれるほどには強固な理由を。

誰か、私を納得させてくれ。近くにある単純な解を拾って笑うだけでもいい。視野が世界まで飛んでしまった私を論破してくれ。

君に問う　　で？、と聞かれて、君は何と答える？

ヒント 読者諸兄、種明かしまで暫し待たれよ

つまりはじめから結論を持ち出すのは賢い議論ではないけれども、と。

ひとつ。彼が彼女に抱くのは恋心だけではない。脆弱なそれをおしむ気持ちだけでも足りない。愛に命を懸けられるほど彼は幼くないし、動機一個で身を捧げられるほど無我でもない。

ふたつ。大きな手掛かり、過去の回想。それが果たされたのは彼の中でだけ。達成されたのは数える程度、公開されたのはもっと少ない。断片を繋ぎ合わせて尚、浮かび上がってはこないだろう。必須条件は思考である。

みつつ。転生よりむしろ復活。だがひとり、転生者は存在する。

よつつ。因子、引き金、トラウマは理解が容易だと思われる。心的外傷……心を鎖くわすのは文字通りの鍵。開放された時、彼は逆行を強く強く願うだろう。叶えられるのは恐らく彼自身の時間だけだろうが。きっとその時の彼女の存在は予言された通りの、鎖。しかし出方によっては鋼鉄の刃となるかもしれない。

いつつ。いまだに着地点の定まらぬ紡ぎ手。実は今も風呂敷は広がっている。わかっているのにやめられない、中途半端を完成品として掲げる、そんなタブー。

つまりこれは遊びであるが不真面目ではないのだ、と。

清掃部隊のお話

さて、困った。目の前で咆哮する巨体。醜悪で傲慢で馬鹿みたいな。

どう相手したものやら。 “どう手加減したものやら”。

気が付けば魔物……ではなく俺が横たわっていた。真っ白なベツトに。

よくあること。いや俺にとっての話だが。

「我々がたまたま近くにいたから良かったものの……。本当に、やめて下さいよ」

ほら、顔にはあからさまに迷惑ですと書いてある。ここで反駁するほど俺はガキではない。

「給料泥棒めが」

去り際に吐き捨てられた呟き。聞き慣れた悪態。まあ、間違いではない。“汚れ仕事”を専門とする俺達の給料は普通の騎士団のウン倍だしな。しかしな

「本気出したらお前達なんてミンチだミンチ！」

俺の心の声が聞こえた、のではなく、隣で親指を下に向けている部下の姿。そうそう、立場的にはためえらのが下……つまり騎士団の最下層はためえらなんだよ下衆が。と調子に乗って同調。いい年こいてちつさな地位にしがみつきやがって。その顎ひげ三つ編みにしてやるうかおっさん。

「もう……どうなるかと思っただよー」

誰もいなくなった途端に体の上に負荷がかかる感触。毛布をかけた自分の腹を見下ろせば、猫よろしくくたりと擦り寄るアホの姿。なに頬擦りしてんだ。気色悪い、離れる。

「急に動かなくなるんだもん」

「俺があのからいで死ぬかボケが」

それにあの時動かなかったのは力の加減の仕方を考えていたからで。その間に一撃を食らったのは事実だが。

「大丈夫っ。僕が翼もいで爪折って尻尾潰して仇とったから！ 最後はあの小太りが来て横取りされちゃったけど！」

「なあにが大丈夫っ、だ。サムズアップしてんじゃねえぞコラ。んな急所外してばっかの攻撃、ものの見事に拷問だろーが。しかも俺死んでねえし仇言うな。あと仮にもあのおっさんは年上なんだからせめて“金と脂を蓄えてよく肥えてらっしゃる”と言いなさい」

「ぶう。だつてさあ」

「っーか鬱陶しい。離れる」

「いやー！」

くそ、どんどんくっついてきやがる。胸に頭を埋めるな。これじやまるで俺が押し倒されてるみてえだろうが。俺に野郎を愛でる趣味は無^ねえ。

「んーう……」

甘ったるい声を出し、最早完全にベッドの上に乗ったアホの向こう。沈黙していたはずの扉が開くのが見えた。

この馬鹿力のアホを一気に振り落とすのは無理。入るなど叫んでも間に合わん。ならば。

俺は傍のテーブルに置いてあった菓子用小皿を構え、

「失礼します隊ちよ　ごがッ?!」

部下が状況把握する前に投射。命中。

「うゝ?!」

何事かと一瞬力を緩めたアホも、これ幸いといついでに肘で撃破。
……この石頭が。

「えへへえ……いらあい……ひひ」

意識より先に気持ちがお空の彼方へ飛んで行ってしまってるような顔で言う。こいつの頭の中で花見でもできるんじゃないかなるか。俺なんかよりよっぽど入院が必要そうな二人の部下を前にして、
ようやく大きく息を吐いた。

八番目の初夜の後

「それで、」

上質な赤い布張りの椅子　玉座に長身を埋めたまま、男は退屈そうに自らの指先から伸びた爪を弄っていた。長い脚を持って余したように組み、煌びやかな肘掛けに一片の躊躇もなく腕を預け、数段低いところに立つ女の報告を受ける、“王”。体現するのは　傲慢。

「まだあいつは妖精の真似事をしているのか」

低音が、赤い絨毯に染み入る。端正な顔立ちはいかにも神経質そうな印象を与え、しかし誰にも逆らうことを許さぬ王者の風格が、がらんとした玉座の間を異様なまでの緊張感で支配していた。

実際その部屋には男と女しかいなかった。玉座から下へ続く赤絨毯、一步踏み出せば無機質な石畳。色を確認できるのは僅かな範囲だけ、声の響き具合で広いであろうことがわかる部屋は、ほとんど暗闇に呑み込まれそうに壁も天井も目視できない。

自身の鋭利な爪を仄かな灯りに透かし見ながら、男はひとり小さく笑う。

「疑わしきは罰せよ」、いい言葉だとは思わないか」

「……そうね」

「疑わしきは……では“愚かしきは”」

「……………」

「愚かしきは、勝手にくたばる”。そうだろうか？」

女は体の線を強調するような闇色のドレスを纏っていた。男と同様まだ若く見えるが、異常な空気をものともせず妖艶に微笑んでいる。食虫花を思わせる鮮やかな紅唇を隠したのは派手な扇。尚も玉座を見上げ、言う。

「薄情ね。今回ばかりは彼もただでは済まないでしょうに」

対する男は爪を見つめたまま一笑に付す。歪めた表情には嘲りの色がありありと浮かぶ。

「知ったことではない。大体、“名無し”が“二つ名持ち”に適うものか。愚かしい」

「じゃあアンタがつけてあげれば、名前」

何気ない調子で放られた言葉だったが、男ははじめて顔を動かして女を見た。平坦だった紅眼に、ようやく揺らぎが生まれる。

「私が名を与えれば、限界を認めることになる。私以上には至らないことが定まってしまうが？」

「どうせアンタを越えるなんてあり得ないんだから、いいじゃない」「それもそうか」

男は気紛れなようだった。否、周りに興味が無いと言っべきか。ともかく彼は至極あっさりと言を受け入れ思案し始めた。頼杖をつき、白い指先で肘掛けをコツコツと叩き。

「ならば 《幻夢》。これをあいつの仮名としよう」

ところが女はエメラルドの目を細め。ふと首を傾げて、納得のいかないような素振り。

「……何か言いたそうだな」

「んー、悪くないんだけど。ほら、アタシ達って“一点モノ”が好きじゃない？ 《無限道化師》と少し被らないかしら？」

「ああ……確かにな」

冷えた大気が微かに動く。女はパチン、と扇を閉じた。彼女が背後を振り返ると、再び肘掛けを叩いていた男が唇を吊り上げたのは同時。

「では……《虚飾》というのはどうだ。なあ？」

静寂を破るひとつの重たい音、呻き声。光届かぬ暗闇から転がり出たのは金髪の男。「あらあら」と女は軽く顔をしかめ、王はただ眉を動かした。

「あ、ぐ……っ」

金髪の男は一目で瀕死とわかるほどに無惨な姿であった。何せ全身血塗れで、更に質たちの悪いことに、眼の焦点もろくに定められないくらいの錯乱状態にあった。

「だ、め……だっ、ああっ！」

無関心ではないが、歓迎するわけでもなく。無いものを求め必死に這いずる男をあくまでも冷ややかに見下ろし、玉座の彼は静かに問うた。

「貴様、“何人殺した”」

「わっ、わからな」

「七人だ」

呻く男には構わずに、男は突き放すよりも残酷に告げる。

「愚かしい。少しは獲物を選べ」

「ああ、あの娘はっ、」

「死んだか？」

「ちがつ、でっ、彼女は、」

見下ろす男の瞳が静かに細められる。突き刺さる、抉り取る、冷たさ。

「臆病者が。さっさと連れて来れば良かっただろう。娘ひとり、貴様ならいつでも内側から破壊できた」

「ふこ、不幸に、なる！ あの娘は！ あの娘は　！」

「もういい。去ね」

ふと向けられる鋭い指。蒼白いそれを一本、金髪の男に対して動かせば、もはやその場には何の痕跡も残らず。

「……“消した”の？」

少々驚いた様子で女が問うと

「“帰した”だけだ。あれには頭を冷やす時間が要る」

男は淡々と答え、大きく息を吐いた。

かと思えば、つと顔を前に。目線は部屋のずっと奥、暗闇の向こう。

「っ！」

唐突に彼は身を強ばらせる。その瞳に映るのは、金色の軌跡。暗闇を切り裂き真っ直ぐに玉座へ伸びてきた黄金の鎖。男の身体もろとも穿^{うが}とつとする凶器。先端に錘のついたそれは、男が軽く首だけを傾け避けると、玉座の背に一瞬で巻き付き装飾を削った。

「……これだから敏感な奴は。たかがあれだけの力の行使に気付いたか」

まるで危機感なく呟く。今やその空間を満たす殺気は、ひとりだけのものではなくなっていた。

また、女は暗闇から玉座へ伸びた金色の繋がりを一瞥し、闇に紛れるようにするりと身を引いた。口元に艶やかな微笑を湛えながら。

「暫くお別れかしらね？ “彼”、結構本気みたいよ」

「さあな」

女の艶めかしい身体が溶け消える。それを横目で見届けた男はやっと腰をあげ、わずかながら愉快そうな笑いを洩らす。無論緊張は解かない。気を抜けば“やられる”のだから。

「……なるほど、確かに今回はいつになく追い詰められていると見える。これを使うべきか？ ……」

右手を滑らせる。出現したのは一振りの長剣。

刹那。空間を揺らがさんばかりの咆哮と共に、鎖の彼方から黒い影が飛び出す。煌めく銀光は鋭い刃、握り締めているのは男だ。…玉座の男と似ている？ 否、むしろ。彼を殺さんと打突してくるのは“彼自身”であった。

「この肉体は“私の”ものだよ、厭うべき“私”よ」
「黙れエツ　　！！！」

ぺろりと唇を舐めたのは狂気の彼。渾身の力で武器を振り下ろしたのは殺意の彼。

欠けた彼らの争いは果てず。失った欠片を先に手に入れるのは、何れの彼か……。

脳内ファンタジスタ

なくした原稿用紙、誰もいない公園、空色の自転車、棒付きキャンディー、季節の匂い、真夜中のネオン、校庭での散歩、古書、ボンボン。

或いは脳内垂れ流し。シークエンス。

既に埋もれかけの、うしないたくない幻想達に捧ぐ。現実が現実のままでありますように。

たぶん、家の中。確か、仰向けに寝転がって。窓から顔を出して空を見上げた。

春だ。あれは春になりたての空だ。

暖かい陽射し。吹き抜ける風は少し鋭い冷気。

車が空を飛んでいた。まるっこいボディの、玩具みたいな小さい車。手を伸ばせば届きそうな。

ふと見えた隣家の屋根は赤色だった。

車は青色。

空の色が透けていたのかもしれない。それは映画で見たとあるシーンのように透明な車。

呼ばれたから手を伸ばした。すごく幸せな気持ちだった、恐ろしくは。笑っていた気がする。

もっと他に体勢があるだろうに。縁が食い込んで背中が痛い。

それでも動けないのは、車と一緒に透明になっていたから、だっただよつな。

そこで目が覚めた。

窓が見える。逆さま、何故なら仰向けに寝転がっている。縁の代わりに肘掛けが当たる。ソファーの上での昼寝。

テレビから笑い声。消えかけのストーブがはせる。

呼ばれる。呻く。

今日のおやつはかりんとうだ。

そうであるなら、また、いつか

こんなことになるのなら、救われたくなんてなかった。

青年と言うにはあどけない顔、少年と言うにはしなやかに成長した体躯。ずんずんと草原を突っ切る彼の口から漏れるのは微かな旋律。

“世界は言葉から始まり”

語り掛けられたかつての言葉を思い出す。大好きなひとの優しい微笑みには、いつだって切ない影が付き纏っていた。何を言っても、いつになっても、まるでおとなの振りをした子供みたいに。

救われたくなんて。だけど。

嘘。その命懸けの愛情が、嬉しかった。

本当。あのひとは救われたのだろうか。代償はあまりにも大きかったから。失ったものに見合うものを得たのだろうか。それとも、何も求めなかったからこれでいいんだと、まだ言い張るのだろうか。

“意志は歓びの詠から始まった”

歓びなんて、もう一生感じるものか。自分を置いていつたくせに。大嫌い、大嫌い、大っ嫌い。踏みつけ、叩きつけ、歩む。身勝手な貴方なんて、傲慢な貴方なんて。

本当に憎らしい。憎らしいくらい大好きで、だから、彼の唇から吐き出される歌声は何の感情を表したもののなのか、本人にもわからない。

“衝動を、紡ぎなさい”

思い出すのは、頭を撫でてくれた大きな手のひらの感触。包み込んでくれた甘やかな温もり。

離すものか。誓った。

離れないで。願った。

けれど、あのひとはもう居ない。彼は腕の中の純白の衣をより強く抱き締めた。自分を守るためにあのひとは全てを失った。ただこんな布切れを残して。

“たとえ何処にいても”

うたう。ひたすらに前を見つめながら。一步踏み出す毎に、振動で途切れ、息継ぎで途切れ、嗚咽で途切れた。

どうしたの、どうしたの、愛し君。零れた水の塩気に、草花がそっと顔を上げた。

うたう。歪んだ顔をきつと上げて。唇をわななかせ、涙を飲み込み、それでも彼はうたうことを止めなかった。

響け、天高く。届け、あのひとの所に。

“お前の声は私に届く”

この衣を受け入れたら、用意された椅子に腰掛けてしまったら、あのひとの帰る場所がなくなってしまう。

座りなさい、背負いなさい。

言われる、見つめられる、わかっている。それが役割だ。

歌声が止む。目の前に広がる赤い花の絨毯。途切れた先は断崖最後の舞台。

ここで、あのひとは、最後に振り向き、笑った。

“さらばだ……私の愛しい”

地に座り込み、彼は衣を抱き締め泣いた。大声を上げて泣いた。あのひとの匂いをこの白布にずっと封じ込めておけたらいいのに泣いたら、涙で流れていつてしまう。

だって、あのひとは最後に何て挨拶したろうか。幸せを祈り、再会を願い、けれどいちばん最後にはさよならを　左様なら、と。受け入れてあのひとは身を投げた。

ずるい、ずるい。首を振る。だって、あのひと自身が招いた別れだというのに。それで幸せになれるはずなんて、ないのに。

“笑いなさい”

そう、いつもあのひとはそう言った。泣き虫な自分を抱いて。

“お前の笑顔があるから私は頑張れる”

ほんとうに？　問う。答えはない。ほんとうに、いまここで笑っ

たら、貴方は幸せになりますか？

笑えない、もう笑えない。

だけど。

歌声と、笑顔が届くなら。それであのひとの憂いが少しでも晴れるなら。

“愛してる”

僕も愛しています、伝えても伝えても足りないくらいに。

燃えるような赤の中に横たわる。強い香りが空気に染みる。腫れた目で仰ぎ見た空は、馬鹿みたいに遠く澄んでいた。

ねえ。彼は囁く。僕を隠しておくれ。誰にも見つからないように、何も見なくて済むように。

花々は一斉に首を振った。だめ、だめ、愛し君。それは、あのひとの願いではないから。

知らない。彼は震える声と共にひとつ茎を掴んで言う。知らないよ、そんな勝手なことなんか。

力を込めたらそれは簡単に折れてしまっただろう。そんなことをして何になる。手を離し、目を閉じ、深呼吸して、再び彼は横向きに地面に寝転がった。本当は、知っているから。

“甘えなさい”

甘えるのは、相手の許可に身を委ねること。自分の願望で相手を振り回す我儘とは、やはり違うのだろうか。

我儘なのは甘えさせる側だ、貴方だ。我儘な貴方の願望に、身を委ねなければならぬ。貴方は、僕と同じように、どうしようもない子供だった。

吐息のような笑いが生まれた。白衣を強く抱き締めて、声に出してみた。

仕方ないなあ。

身に着けていたひとには抱き締められるばかりだったけれど。すん、と鼻を鳴らして、頬を少しだけ持ち上げてみる。

仕方ない、ひとだなあ。

くすくすと、彼は笑う。地面に流れた雫は、とろりと静かに吸い込まれていく。

“また、いつか”

きつと、必ず、絶対に。あのひとと過ごした今までの日々も、あのひとが居ないこれからの日々も、忘れない。皆が忘却しても、自分だけはこの衣を守ってみせる。

約束だ、貴方が帰るまでこの席を　責をあずかります。

いつか会った時。僕がおとなになっていて、貴方を驚かせてあげます。
そうしたら。彼はくしゃくしゃの顔でひとり笑う。そうしたら、こうやって、抱き締めてあげられます。他者を抱き締めるばかりだった貴方を。

“一緒に、幸せになろう”

ゆっくりと目を閉じる。ねえ。赤い命に囁く。少しだけ、休ませてよ。

幸せ、幸せ。そよ風に花はうたう。貴方は幸せ者、名を受け継いだ御子、愛し君。

うん、と。うなずいた表情はもう歪んでいなかった。

さわり。吹き上げる風が金糸を撫でる。歌声は届いたのかもしれない。懐かしい温もりに力を抜く。

そして濡れた顔を白い証に埋めたまま、彼は静かに眠りに就いた。

こたえ

振り返ってみるといい。

【奇妙な数】の話は“彼等”の物語。刻まれた過去であったり、紡がれなかった分岐であったり、やがて訪れる未来であったり。同じ思考を共有できなくても、手がかりとして活用できるだろうか？

【偶の数】の話は偶の暇潰し……にしては機会を狙っていた感はないけれど。日の目を見せるのはいいけど、きちんと日除けと埃避けを被せてやって。でないと色褪せてしまうから。

しっかり心に刻んだら、あとは前を向くといい。

全ての一步が話のはじまり。区切りは一旦、そして先を描くのは貴方自身。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4116j/>

断片集

2011年12月19日01時54分発行